茅糸集

妙言

古今

師皇仙人

狩野信旭

信濃国諏訪郡玉川の里形の人田
田行ふ小仕年の頃より俳諧を好み老み
も亦業勤むる小農業み従事ふて
傍ら商行を営む　身み智恵をしぼり
以て里徒を導て能く道ふ業を善
家に誘引ふる彼業偶ふ三年の頃
分身勤ふる所ふ角に独み天寿寿
年時ふて享年古七十五歳ふ一期し

世ふ多くの人の家ふ入り人年小稚
の忘ふ為り或ふ小を今を世俗ふ
ふ作て小集を作り江湖ふ往復
星霜て所世雲信ふ所ふ世交の
好ふ如ふ俳ふ俳言を書て送りぬ

寛政初年

同六年六月

田行ふ小稚ふ記ふ

四十五年ふ作ふ所ふ　素水

明治二十六年一月
七日一周忌の為め
文月吉辰新築園
奠刻

服部

田鄰居士

其姿聖七四十山七里之住世
夜毎〳〵ふるる月の影　柳庵
烟も新屋敷の軒端ふかみて　良久
却帰のきゝ為る笛の調　卜水

伊勢のまつゆきとよみうりくと　世和

いふ孫くし苔の陣屋　一柳

妙もんハ鼠鳴きてふ　天竺　義碧

遠くとやぶくう雪の陸の奴　少年　いち女

何くも黙くてくもく年繰くく　傳雨

ぶあきせうく妹入きせうと　伯山

まく腹けるとなる幾とも芽ふ乳母　鬼灯

寒くもくるくるくんと石かき　江水

百ぶりせふ市圓を摘むせうの表　一青

あくまんくく餅くを焼く　雪水

筆さうの禁ぶのうの鶯の息　葉朝

陸くの信月のくく　彩湖

花ふ色いれも重くふ咲くく　雪底

筆く掃ふ巴字の雪　知老

伸縮ふくくくく蝶寸　子交

まく掃る秋清すくく水　平石

俗塵も寄せぬ雅を求むる眼ぞ高き　春山

本降りの雨に出で来て　花霞

帰るてふ鶯を半の夕を捨て　渓堪

浦代の掃苔をするの実神　くつろ

更に雨を起すも苔き蛙の沓戸　柳山

捉打けて曲る濃砂　金山

ふりて捉の寂れ　春静

大筆にあるす小刀の穂　春雄

春月を面に廿四番し　朝霧　芝家

良宵とまらぬきつと冷し　梅玉

蒙夏の東科の照り　月砂

人も絵と思ふ東郷　雀影

まくれ出て孤の犬ふ声まく　勇玉

るるもちろんの彩　孫市

花ひと未静くふの香ふ　千代

月剃ふ小舟海松のあ　梅吼

掃除しに第ちまゆ初月後　田村左士

志とる枝の秋ふ桜る春の書　松東

色くぬ和のひとと源家ちく　澎水

数ど色河の真ふさく　野友

納豆の甘ふ多ふ後到加減　明京

壱を部合ふ鶯鶯部ふ　菜明

桂百度の果し次年猪馬ふ　豊山

時間を活さてもよふ　泉桜

おくのつもりもふ限ちて　松風

金のある末の切る赤後　雪山

桜ふ朱の絵義ふ咲ふく　古外

流ふ風の書ふ赤ふ河　泉阿

帆ちふの家ふくちと月の清　涼湖

桜春ふ苦ふちふ和新雪　梅家

屠ひも軍の世ふ形ふ砂ふ　松嶽

[illegible]　四月

[illegible]　青木

[illegible]　曙東

古一折

連句

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風きこゆ雨を待むや長揖す
凍解る中ふ四方隆ふれり
百姓の見こてもとりや解る事
やうく鶯掃や上野の初梅
一昨日の風ふ某も見き初梅
離れ鳥や鶯ふ雄ふ鶯さる
あくふ鶯を後る日ふ
狼も出さう山中さふ

月の友むらし鳴るのうち友鹿し
松枝も照るまるまで夕もみ地
夕陽水海すあるもや片明り
宇佐八幡の宮あるて
飼鳥の鹿まるや神の亀
男ふ迫ふ行れり雪の情
橋殘雪枝さてり雪ふ
灯井鮮雪ふる門や雪明り

迫江八幡は良聖ふて
朝風や雪ふ雪ふの初の達
永し種ふまるや師走の雪ひ風呂
年底ふ毎まるや除夜の鐘の数
除夜の鐘うあり鐘ふや京の野

國ゝう春の味ゝ九橋の秋　ゝゝ城

人ゝの住ゝ世ゝ和の月明ゝ　竹末

石原や咲ゝも散ゝ花　青冥

戰ゝ新よりゝゝる紫苑ゝ　箏浦

ゝれゝの野小家もあし寸の雲　清雄

時ゝう年昇りゝゝう秋の月　花朝

怖ゝまゝゝ十八日ゝゝ月のゝゝ　孫花

東京

月のかゲやうつるさまの思ひ　重羅

名月やひとゝ枝持まる秋の色　梅年

花陰ゝすゝしかりしかの清秋　羅蘭

這松のよるをまつや秋の風　玉峰

河陽や岸をとゝ河面に月と夜　千家

月ひとり赤とあるる秋の音　永機

秋まつゝ蓮葉ゝ秋のまつゝ　南鈴

大坂

月入りてあと稚のなつの蔭　雪笑

西京

白山や河蔭ふかゝて秋の風　梨素

綿まくゝ赤ゝ白しと月とゝふ　稲安

木新ゝ秋まつゝ色あるゝふの月　賜秋

長崎

遠里や笛も〻宵ハ月のまの　碌雨

稚女や片潮ハ月北をふまる　二道

朝寒や月ふかきまる水のうち　荷尾

柄もまく新の寒き落月哉　白二

三日月ふ雲ふ数をてふうま　素陽

出ふちるこゝも時雨の雨　相州

常世のうく寒る枕ふ　耕雨

芋の植ふ昏る雲の月　果樵

美濃

日生きのう咲る数や垣の屋敷　夢庵

月ひとふ月きふのふるめか　仲穎

加賀

結ふ出て乳戦ふうき屋敷　賢外

籾白ふうや苅生う糸すゝき　拙堂

出雲

名月の涙ふ雲一湖う那　曲川

三河

蒲屋十郎里に家を折り　蓼宇

遠江

水彩や朝の稲妻あり　本江

海山や幾よ重の人の人　十湖

摂津

水の味殘る蓼太宮ゑり　雪蕉

穿ふる林の寺や月まち　乙鶴

上野

稲妻の穿ちやすや海の果　雪山

相模

綿寺や新良ひ山の家の祭　秀峯

伊豆

色変ぬ杉や山路の朝のうち　連水

駿河

雲ちぎれ世一月彩や相ひ家　竭雪

水ふ新清くとうとう夜柳　拙堂

涅槃会の打ちあるを向うの峰　石

相模

降るは一累消えぬる涙の義　東旭

信中

京の山ちらるる世界一の家　半水

近江

秋の日は伊勢より越さしうし　九峰

下総

秋風の吹くある世界中の骨　旭系

苟相ある陸き回面か　逸宗

越后

朝皇の蒼見て赤く紅葉　本南

見るうち思ふ言も月の悟　晴雲

深きのふ蝋ふ蝋ぬ虫の芭　太芭

夏陰

夏ちらふ浅りうの月　南山

和歌所海中遠き水の色　江二

ときの夕べ　下野　世山

椎の葉の落るや苔を研ぬ　月静

月の影を清ぬ寄る色　追鐘　峰原

甲斐　草園

宿を問る春時雨ふり過ぬ　菊雄

筆筒に挿す作ふり毛筋　計舟

雪の沈の濃ふり　秋の原　磨石

年ふり耳まで赤の色　半眠

身を忘れの古屋や苔の柳　久年

情を尋ぬ影の月　白球

月代や面ふ素の山　姓良

秋ふや不動の井戸の味　明海

白雲や水際清きを月の尾　雪石

風鐸の拍子ぬけぬ秋の蝉　福寿

江戸

もの寂る中ぶ聊や世の事　鹿洲

静さの余て淋しき萩柳　對山

さ草ぶ花ありてそそ淋しき　春色

さきあそこふあらき初雪や秋の色　菜志

俳り淋し柳の枯る夕ゝ　希静

雲の幾度破れて長き秋の空　蝶夢

仲那

さきくを思ふ人へ春寒し　凌々

草の葉ハぶふあり残る　古庵

風誘引てもあく初ゝこの郎　東山

除ふ夕を葉ゝ入角陣ゝ　春松

掃ふ当ゝ聊めゝ居やこの梅　春雲

物新のおくさびや寒の月　五出

初秋や鯨ふ仰く寒の雁　鉄斎
寒垂き蔭の風情や明月哉　椿斎
山ハ山野ハ野とて秋の月　貞山
寒年ものゝ空の波の音　公雄
松風の音分ふ志ゐや秋の雲　東海
近き所ゆ舟ゆ出る人の影　丁女
寒ゝ雲やゝふ集ゆや雪の海　つま女
待ふ風ふ清ゝ秋の月　蘇翁

星ゝさへ帰る里ゆや寒時雨　三中
降時ゆ雲ハ風ふ寒し　椿斎
初ゝ雨ゝ書の灯ゆや秋の暮　一泉
眼の前ゆ田ふ波ゆや寒の色　一舟
萩ゝ末ゝ雨ふ時ゆ松ゝ雲　雲海
草の戸ふ吹ゝ入ゝ秋の声　風儀

何波

知て居て切箱遠し秋の風　富水

詠歌　永明

[illegible]　東素
[illegible]　壽翠
[illegible]　一樹
[illegible]　玉水
[illegible]　竹村
[illegible]　竹水
[illegible]　袖水

何とあく[illegible]重き朝や[illegible]時雨　一邑
[illegible]　岩水

四賀

[illegible]　春乗
人[illegible]門ふ[illegible]し[illegible]の[illegible]　釜川
[illegible]の下やき[illegible]　抱舟
[illegible]や[illegible]の[illegible]　友補
[illegible]ふ[illegible]の[illegible]　衣帆

笑ふやうなるこゝろ地や言機義　水山

ふるさとの酒の香　柳斎

六吟歌

軍艦や千ふりぬる月の影　芝仙

咲そめし藤の花の色　蒔園

新米の人に喜ぶ絶食　精嵐

白雲や夕べの陳情　忠乗

鈴虫の音や宿の立ち寄　芝軒

先年亡し人ふ恩あり屋の月　芝居

一吟歌

実に春雨の降る花の雫　魯山

神垣の振り分け髪の立田川　甚梅

うぐいすやふくの使ふもの　柳水

恋しさをますや春野の笛の色　蕉雨

四方の海ふ宝船の舟の内　境雪

月桂の清やうきく柳の葉　為玉

相聖素堂世ハ蕉を語りし　香峰
白雪や　都も少き　夢深し　有乎

他の草に持れて　我亦者　霞系
竹の戸や　野ハ白雪の　朝朗　降雪
とちら　振向くも　明し　秋の夕　と女
持参て　来る菓の　仕舞　入亭
去年の日ハ　何と日ぬ　秋の風　素宗

雨後に　ふまれ　ひ　ゆ　う　え　ま　の　う　天祐
牡丹　花に　ふ　れ　り　の　ま　向　乎　出淵
見入　雪　春　の　雪　ふ　秋　の　別　魂　乎　玉淵
立　向　ふ　西　山　晴　て　三　日　の　月　如聚
秋　風　や　水　も　な　ま　な　ま　の　新　梅扇
ま　ま　ふ　涙　も　て　な　ま　の　本　向　所　涼月
投　掛　て　幕　に　と　ま　る　情　哀　乎　花月
古き人を　新　婦　に　移　す　陸　義　所　金水

一日の月和うれしく大根屯　麻素

蒲屋ゑの家も驚きぬ白糸　春全

新良の咲や来あも鶴　林永

男は生き去年の野分の矢ぶね　仲雄

併や軒ふるる者堪兼　鄰人

立ちとまりて去る雨の舟　葉永

名月や世の新を照の上　蓑拙

死ぬも世の中や月の庵　西義

紙衣の世を世事の移ひ　仙友

迷ふ者まるてあ　女郎花　一声

外堤の朝を残る数家あ　泉川

過ぐふ友達まや月の宿　東山

小さくも花咲あ一枝の中　一笑

蛍くふ野原の眠ら桂頼ず　笑・雄

あはつらし謡うたハん秋の暮　耕甫

庭さしに菊ハ残けり桐一葉　寉松

何となく影さへせぬ渭水の霧　素残

夜あけの情乃留守し螢ハ哉　買帰

御簾越やひとり手すも早山の雨　ひろし

静さの余るや春の難きかり　志静

音のして思ひきりあかり月の雨　眠水

桐ひと葉秋の風情を添せけれ　晴峯

捨られぬ筆のあとあり捨扇　草山

名残めく秋乃色咲錦哉　春月

桐ひと葉ふるの世ある思ひけり　逸梅

仰へのいきも読きや念彌　六公

湘南

萩寒る日ニ秋風も鐘ニ哉　一枝

丁子の香すゝや相撲の人気指　雲月

伊勢ハ残る菊ニあてもある柳　球草

嘯月報告の立ち居の舟　雀庵

初冬きさらぎる海せきもれ　森月

遠志一色　梦中の姿　梅隆

蓮の葉ちる中の月　素月

悲しみ深まるうらの庵　梅堂

篝火焚かるや別離の場も哀れ　照月

更るにつれ水音ちるし秋の声　里月

夢年の秋を名残り乙鳥　回雲

秋の月忙しく雲の舞うあり　梅枝

海棠の声さへ忙し秋の音　梅里

月の夜余あいと冷えもうり　素好

来るるふ思ふ夢もやはり乙鳥　秋月

朝日ちらつ夕ふ雲やはり秋の輝　明機

秋の夜少ふ冷えるあるあり　泥坊

あるいものと思ふやはり涼る夜　如雲

夜柳ちるは時節とあるか　禅仙

みちの蒸鍋　吉里もらふひろう　桂高

秋来ると世思ひふかまる柳　竹洲

ホトトギの声ちらつや墓所の松　亀石

中洲

夕栄の思ひもよらぬひと栄　而丘

惜しく雪と消ゆ花必ず　重機

冬ごもり夜大小半く清ふまず　うつ女

ちりぬるを名ちらちらと紅葉ちる　今昔

近ちかく火ハ鎮しきもの下　米安

萩のちる岩訪りやホ秋の雨　雇友

花もみもつるあるよや梅寒地　松花

虫の音の近くゆまる出格子　蒙壺

名月や西日ちり古　雪

美しく雪も乾きく破ち世哉　小花

立き人ゆ伊　桐乃ひと葉ず　如拙

萩ちるし海も名の雨ハ名乃雨ず　静洲

庵をしぬぶ草の葉ずり　為一

見るまゝに皆打ぬぎの袖のつゆ　生碌

庵ゝ孫の袖の重さや蓑笠　志碌

月高く牧峰寺の中の虫　雨室

ゑんとゆ聴も佛一言説法　生伯

立寄ゝと思ひ出すや懸傘　素水

送り犬のあとをあやまるふるゝ　雀年

紙の寺年経ゝ蓮の咲きぬ　文子

庵の窓きれぬ木の張り形　市我

宮川

池の面ふ伸ゝ柳の柳　一明

出竹ゝ大ゝ寄きき素足　市仲

ひと年を手ふ拭ゝ迄懸　景山

蓮ゝさへ白きゝ佛一すの庵　廣山

打出ゝ磨き花型や長の旅　柳太

力ゝ降ゝむ面や梅もき　市谷

時雨降る佐保の山路の紅葉かな　伊月

朝皇や高野の去年の霜を踏　加山

思ひ出す都の花や野の梅　うはる

秋中のうきまとめる花野哉　紅雪

あるて思ふ人の面影の月　雪渓

雪の野や老樹の老樹の老　松濤

俳諧の袖不奏侍ふ世の外　千葉

落合

菊名を問ふ山路の秋の柳哉　春朝

白雪の猪臥昭ふ夕べ哉　文孔

境

大文字の火影ふ筆の戦きぞ　紺市

筆塚や松葉を焼く秋の雨　寿山

月いまさきの月一十六夜　峰高

老くるまでの俳諧の師　東木

本郷

唯一相の少鍬手籠の底拭ふ　霧山
苔むすまで見るものあるる柳かな　菜好
地ふもとる赤と赤きぬ秋の輝　錦為
鶯語の枝手青甲　秋の風　潮水
鶯笛の響古ひつる月影　池竜
菊咲甲きのかの酒の二日酔　庵山
塩刷る浦ある小屋の虫　未来
ゆゆの消る部金ゆや雪の壺　乎雪

菩提寺の苔の紅葉の
消もふつる甲月の雲　金泉
枝ふ見の折り柳かな　清花
近所のふきせるあぬ柳の雪　乙甫
秋風甲高ける鈴の音より　寿弧
菜ものふ甘ふのまむ玉拙屋　秋舟
神下甲出ふ赤沙夜の旅　水仙
遠火甲河ト筋ふ玉きる　鈴池

朝ぼらけ入てあかの竹屋の門　春月

雲の声ふ剣の林さ高もつる　一角

明ぬ声やすみ山ひとも嶺　苔宜

豊年

里家やー臭ふひやうと高時雨　九華

金すまを蘇と高の時雨　亀山

風新る巻ふい羅ふ　久方

苅ぬて夏やほとゝ桔梗の　法水

萩すをさゝ気のつる芙蓉　英明

道ゝ大やー山ひ掃く人の声　東湖

雲嶺やー高天原ゝ高ふ　正風

湖ーけふ唯入る秋ゝ夕日の　天嶺

萩ゝ花ふも萩ふ芙蓉の玉　四月

例ゝて今年も翼ふ鶴の花　抱湖

系の秀ゝ石碑ふ絶ぬを向ふ　明深

蔦の葉ちるも萩寿ぐの　朝山
白菊は花の咲ぬ咲ぬ　大哉
萩ちるは人を柳の事　松濤
客人は笑ひてうせる　うつり
宴遠る深きをのの音ぞ　洲水

未深

挑灯の影淋しき鹿ぬり　一庭
拾つけし馬の中背の西瓜ぞ　山未

[illegible]の[illegible]の[illegible]ん　[illegible]
春は四季つくぬ菊の白さ哉　雪風
村の上下の青すると山の雨　笑壺
蛙鳴く中一月を延の伸まく　洲水
他國まで人を去れし[illegible]柳　晴山
あけまくも時節を今と萩寿　梅集
[illegible]晴て清る花火の雨　其正
[illegible]の集　洲月

伊吹しみふかき月の秋　對岳
鬼瓶やうもりと下国の　晴湖

湖東

片あらし一番ちるきく柳の影　一志
苦くふ白髪ちらす風和らぐ　四海
見るほど軍ふつかく高ぶる　花友
結ぶ人ぶ集ふ所の踊り　徒月
風強く聖ふ出る秋の夕べ　可徒

然りけり人り嘶や秋の色　朗々
おさまりの連歌の数長き　澤山
碑ふ輝ふ八月の草の花　雪窓
花ふ来ふ月ふ逢ふ踊り　不孝

玉川

遠ふ神輪も狭ふ寒きめり　東青
月の色人ふ人ふ寒きめり　徒月
玉川の陸ふ立ふし秋の寒　一川

月入あり山の雲　泉里
雨ふるうくひとすきく湖一秋の山　松花
大まるとすもまき柳ず　春山
乗石に第ハあてた蕭の条　岱湖
送火ゆ山のうちのいとまを　柳可
雑とうく袖ぬるゆ春の夜　晴
時きうくまの春ふる時雨　一晃
秋の雨蟲とうのようをてる　揚残

時ちまの春一春の秋　ちうう
澤をを日和もある雁鳥　梅路
峰ゆの風ふちた降の春　白之
雨に春我ゆくあや菜の花　康湖
夕暮を聊一松も今新の秋　梁山
草の春ふ何ゆうる新の春　田水
ふくふ変る潮音や秋の　寿水
俳の掛ゆ春る余きう所　頌風

まつ陰を拾ふ袖にくれ行く
春の夕地をまくる雨のうつり　四方
青もあらしの世界の高の下流　梅雨
金仏はまの向のたや流まつ　輝高
玉川の家のく流れく森の露　梅山
ひとの年情を寄せ菊ふり　其伽
赤山の実成る神の山紫雨　天の川
枯葉く秋の刈り尾のぜ　明星
　　其岱

雲行く月の友　鶴山
西の秋の月や花の芳野山　健亭
遠里ふ灯ひとつ見る秋の夜　東山
春く恩の稲の高ぬ穂の桐　松秋
美し師く沸一番の鋼　雲壺
春を待つ梅の四面ず　春閑
刈妖や名残ふ男ぶぜの花　梅里
晩も無き年や月今宵　孤月

すゝきの一葉ぬけ　晩翠
夏草に深き水の色　明説
萩の葉さえ光るなり　司掾
鹿の声ひとつ聞ふり　文月
鶏頭や萩の葉ふ残る雨　南山
夕ぐれ過ぎ消ぬる秋の雨　苔雨
長き夜や田舞ふ移る水の音　三代志
古の秋の声も聞くあり雲の月　百逸

秋初や水に流るる萩　左月
雨の雫落る重さ乃光りの月　三朝

金沢

蛍かゝる人に恋の名残哉　麦哉
草もまもなく枯るる中秋の雨　竹男

追加

小車の花に咲きあり下闇り　一花

上総坊

秋の雪湯を浴してハさまゝり　冨士見

中湯

朝夕ハ今宵こそ眺の変る　田都

雪もまぬ中ハまつ風の音　横水

森越し七夕の中や秋の嵐　一哉

曳出て見ぬふ所ゝ秋の雨　笠橋

井の中ふ十六夜乃雪洗ふ　竹園

下湯治

あれ点ずして雨を時雨の絶餘哀　曉湖

陸橋ふ自ず名残ず山ぬゝ紬　学山

宮川

入ゝる塔山の月ず一廉の色　東水

玉川

まゝあ山ふ人ゝまゝるや蔦山　梅山

白雪ず里ふ雪ゝの残ゝ　自東

名月ず玉ゝ玉ゝ玉ゝ玉川

[illegible]の山おろし　吉雄

浪山

[illegible]の[illegible]　松雪

豊田

名月や門掃く寺男　為峯

掃覚ふ人[illegible]　春翠

伊那

照葉を狩引き[illegible]　源月

[illegible]

筑戸

萩原や[illegible]月の花　仲遊

伊那

掃きもの小松[illegible]　雲笠

甲斐

[illegible]　重風

[illegible]

[illegible]

秀衡さくハ法花堂に男子し
殘りまの点ハ思ひ出ぬ墨の跡　松嶺
水青くんの青さまる数字ず　芝村
数あるも月ハ去ひ出ぬ静ず　滝川
永ハ春年ハ去ハ歩代ハ踏ず　玉盛
思り世の中を思くを高の月　層氷
ふまて吹こそ世の風　風浦
世を廣く夢ハ隣のおず　代
秀海

追ひ出ず越こ湖て又踏る　湖道
約束をしこ人を毒ハ然の書　相伝
世新を思ひ出ぬ月の月　文義
新を法やを踏ぬ脚の眼ハ深る　一二三
毒一原平思ひの宿や青月数　松年
数ニ一ニ石ハ折ぬ松の郎　竹雨
難儀こハ踏ず寺野や蒔の去　玉月
新こ数こ去ハ寺の去　楓也

大きてけハ昼あり　杜鵑　裏山
ほとゝぎす　小塚
ちの里ふる年　清一　三の月　三松
安川　長安ハ　むさや　軒の霜　鬼無
朝良きまゝ　咲まを　一茶ず　手水
頭着ハ　安ハ　笑く　あり　雪の音　金谷
柳　茶ぶ　ちり　茶ぶ　清く　春月　江翠
人ふる　名ハ　さみ　ゆ　一茶の　雪　和風

連ひとり　欠く　清一　や　庄の月　松眠
水とふ　あも　流り　ふの　水　守所
とも　ふ　峠　雑り　老　や　春の　秋　きゝめ
を　ふハ　年　秋　く　萩　茶　菊塚
子　安ハ　花　ふ　茶　あり　素　まり　拘南
茶　ふ　ル　ん　ん　底　を　降　ふり　芝泡
老　雑　あの　山　も　秋の　石　拘ず　拘居
あき　人り　影一　茶ハ　入　タ　ゝ　茶　木人

永々うち別れの柳ちるうち　孫莊
散ぬも流るるさめぬ蓑まゐり　小仙
物さびしひと筋うるし秋の悴　凍湖
云捨い思ひのあの秋の蓋　希心
蒲の花や華い雄ゐる花下　芳找
蓑ふ蓑流る花野のまぬ白ず　明哉
出る月ハ〻〻蓑蓑や苔の月　可笑
近火や思ひ〻のふん　水音

さき人の別れ出ぬ洗ひうち　良久
ものあはれや洗ふ別れ　義碧
小田の鶴河蓑を出ぬ　春雅
月新や蓑ハい蓑の雨閑　四好
去年の月思ひ出すや蘭狩　楚山

何ぞあらぬ世も色材の花　佐山
掃き〳〵あるう一葉の秋風　廣博
幾ばくの夢のうきを長夜に　古鈴
出でみるいつも持しし翁草　江水
月ぞ手に言ぬ籠の軍の前　梅泰
思ふるるふ持ひし長世　梅玉
筆とるくふつる今朝の秋　一貫
稽書や柳の緑の振り　曽東

お良もちよう〳〵とそこの野　子文
片袖や一葉ふるもの秋の風　松風
故郷へ伝ふる舟の金もの　雪水
何のうて出るや世さく這の人　花雄
ふるう濡るや今朝の雨一点　菜朝
毒蛇でも白菊ハ眼ふ洗ふ　信山
蕣や不思ふるもの面の中の蕊　鬼風
軍を侵　寒ふ舟ふ　連錦　菜明

見返りし後帰るぬや秋の陳　卜水

白雲や見故郷てう原の色　晴山

果てあき命を思ふや秋の夕　素静

蓼踏て茶くさ苦嘗て蓼の実　素丸

夕ゆくまものとちうり蓮の花　いちあ

片袖ハ尾ろ帰くく蓼時雨　雀数

眼も冷る吉や掛り蓼時雨　松隠

元禄の月や去年もあはきう　月砂

迷ふ人ハ有ぬ人ハ有ぬう　琢音

ふとしも考ぬ雪あり十日蓼　泉湯

打ものを惜れく芭蕉柳ゆ　泉筏

立易き月日の中を松長年　陳百

初霜や思へば去年もふあうう　枫山

芭蕉すふ雲くきもの雲の中　澎水

拝殿さ廻るもあり笹の路　玉石
指折て去年の嘯や月の友　梅叟
文屋や寒さも夏のうつくき　お花
引捨やまく眠ふ踏る雪の素色　豊山
約束の一人ふたやん月の友　明京

雁一人尾を曳て寒の月　まつめ
まつ思ふ世ふ嘯すむ虫　用休
里こふ寒ふ秋の淋るん　月松
口先うつきふ苦人く　いよめ
名ふ似ぬ寒さ淋きの兎角　嘯風
交る寒の寒ふ懸る芭蕉　世こ

梅花ふる師の筆跡や家の庵　用休

筆斗机もあるくらふ月　萬糸

入るる日ふ照葉の紅葉哉　糸柳

海山のうすきも月の名残哉　田移

朽もあり者の嶺ルうり中の哉　田思

長ルと思ふひとあるを月の月　柳峰

勝ちもそ見ちる夕あり　柳猿

春の花吉野のミの伏屋哉　月松

碑に鶯の昔を物語る　峰風

数多く咲ても小さき花哉　芽ゝ

叶ふ通ひ安ふ中のあくて哉　比丈

筆くゝ春の光り哉今宵　一柳

隆軒の書を送りし夕の哉　まつめ

廉峰や吉き徒の力　ゆうめ

初時や雪をかきるる春の悔　とせめ

峰一うの雲も出や樓ちの陽春　すうめ

芳ふるる仙撰ミ集めの草の花　いよめ

鳴呼と嘆賜る外り世の柳　嗣子

柳東

茶餘雪の一年

六十五年をは祝世は

陽うとうて

孫を見て我言の新く

雪一一松の一年

雲底

田柳居士の祥忌
祭莚につらなりて

身にしむや声もかれて
蝉にも護りの風

青我

田柳居士祥忌なりけり
けふの法筵に侍りけり
一しほ偲ぶ事を筆にて
しる流水面すに
出くてちる柳

貫珠叟
亀湖

日宮の雅楽原田をもとめぬ
まもん世界ふ海をあけく

折しも佳月
海中に秋の色

[illegible]
芭蕉

芭蕉

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

天の原ふりさけみれば
[illegible]月
[illegible]

明治二十六癸巳年製本

原田屋一周年

今の都の花の盛りも
過ぎぬれば
去年の春の
夢ぞ
[illegible]

上総国清水町